

## 語彙力増強の重要性 —二つの大学の語彙力測定テストのデータに基づく—

森 永 弘 司

### 1. 研究の目的

語彙力は英語四技能の根幹であり、語彙力の増強が全般的な英語力を伸ばす最も有効な方法の一つであることは異論が無いところであろう。中学や高校の英語の授業では語彙学習が重視されているし、また高校受験や大学受験においても語彙力が試験の合否を左右するキーファクターの一つなので、授業外でも単語帳や単語集を用いて語彙力を増やそうと試みる生徒は多い。ところが大学の英語の授業においては、中学や高校と比較すると、語彙力を伸ばす指導は試みられることが少ない。また英語学習に意欲的な一部の学生を除けば、中学・高校生に比較して、授業外で語彙力増強に積極的に取り組む学生の数は少数である。本論文では、2つの私大での2ヵ年の語彙力測定テストの結果を基に、「読解力」と「聴解力」と、受容語彙力、発表語彙力、および語知識の深さのそれぞれがどのような相関を持つか、さらには同じ受容語彙力であっても、大きさと深さを区別することで何が見えてくるかを主として検証することで、大学での英語教育でも語彙力増強が非常に重要であることを実証したい。

### 2. 語彙力について

一般的に語彙力あるいは語彙知識は、リーディングやリスニングの際に意味が理解できる受容語彙 (receptive vocabulary) とスピーキングやライティ

ングで使用できる発表語彙 (productive vocabulary) の2種類に分けられる。この2種類の語彙知識のうち教育現場で指導されることが多いのは受容語彙である。この原因は高校入試や大学入試では依然として読解問題の占める割合が大きく、読解問題の正答率を左右する大きな要因の一つが意味の分かる単語の多寡であるためである。従って進学希望の学生は受容語彙数を増やすことに関しては熱心である。しかしながら、中学や高校と比較すると、大学では語彙指導が積極的におこなわれることが少なく、学生の自発的学習に任されることが多い。その結果、大半の学生の受容語彙数のピークは大学入学時であり、学年が進むにつれ語彙数が減少していく傾向がある。<sup>1</sup> 発表語彙に関しては、本格的な英作文が出題されるような大学を志望する学生はかなり熱心に習得に励む傾向はあるが、全般的に受容語彙ほど熱心に学習されることはない。とはいえ今日の英語教育ではコミュニケーション能力の習得がますます重視されつつあるので、発表語彙の増強も大きな課題といえるであろう。一般に語彙力は以上述べた、どれ位の数の語を知っているのか、またどれ位の数の語を使いこなせるのかという大きさ (size) の面からだけ捉えられがちであるが、ある語をどれ位の深さ (depth) まで知っているかという語知識の深さや、どの位の速さ (speed) で語を処理できるかという語処理の速度・効率も考慮しなければならない。ここでいう語知識の深さというのは、ある語の同義性、多義性、コロケーションに関してどれくらい知悉しているかを意味している。以上のことから正確な語彙力を測定するためには size, depth, speed の3つの側面からの考察が必要であるといえよう。しかしながら今回の研究では、語処理の速度の正確な測定にどうしても必要なコンピューターが利用できるクラスが少数であったため、語処理の速度の考察は割愛せざるをえなかった。

### 3. 語彙力と他の技能との相関性

Oller (1979) はカリフォルニア大学ロサンゼルス校で行った、外国人留学生を対象とするプレースメントテストでの語彙力と他の英語技能との相関係数を次のように報告している。

表1. Oller (1979) による語彙力と他の英語技能との相関係数

	V	GS	GO	R	D1	D2	S1	S2
Vocabulary	1.00	.71	.64	.85	.47	.71	-.03	-.04
Grammar Selection		1.00	.79	.75	.69	.64	.04	.18
Grammar Order			1.00	.73	.61	.61	.06	.17
Reading				1.00	.47	.68	.06	.03
Dictation1					1.00	.68	.06	.03
Dictation2						1.00	.06	.03
Spelling1							1.00	.55
Spelling2								1.00

語彙力（この場合受容語彙数）は Grammar Selection や Dictation 2 との間にも強い相関性が認められるが、Reading との間に 0.85 というかなり強い相関性が認められる。その他の著名な研究者たちも語彙力と読解力との間に強い相関係数が認められることを指摘している。例えば、Pike (1979) は  $r=0.84$  to  $0.95$ 、Schoonen, Hulstijn, and Bossers (1998) は  $r=0.86$ 、Qian (2002) は  $r=0.68$  to  $0.85$  という強い相関係数を報告している。<sup>2</sup> こうした相関係数は、語彙数が大きければ大きいほど、ほぼそれに比例して読解力も高いということを示している。基本文法をきちんとマスターすれば、語彙数を増やしていくことが読解力を増強するための有効な方法であり、従って難度の高い語が出題される難関大学を目指す受験生が語彙を増やすことに力

を入れるのは理に適ったことである。一方会話力や表現力と関係の深い発表語彙に関しては、会話力や表現力を測定できる信頼度の高いテストの開発が困難なために、発表語彙サイズと会話力および表現力との相関性に関する研究は、受容語彙サイズと読解力との相関性についての研究に比較すると少ない。語知識の深さに関しては、Meara (1996) が、Nation の Vocabulary Levels Test (以下、VLT と略す) の受容語彙数で 5,000 語以上の学習者の場合、読解力との相関性が語彙数よりも語知識の深さのほうが強いことを報告している。Qian (1999, 2002) も受容語彙数 3,000 語以上の学習者を対象に、VLT による受容語彙数と、語知識の深さを測定するためのテストの一つである Word Associates Test (以下、WAT と略す) の得点と、TOEFL のリーディング部門の得点の相関係数を算出したところ、語連想テストとのほうが強い数値が検出されたと報告している。<sup>3</sup> この二つの研究は、中級レベル以上 (3,000 語以上) あるいは上級レベル (5,000 語以上) の語彙数習得者の場合、語彙サイズよりも語知識の深さが読解力を決定付ける要因であることを示唆している。従って高度な読解力を身に付けるには、語彙数を増やすと同時にコロケーション等の語知識を深めるような学習もおこなうことが必要であると考えられる。

#### 4. 使用した語彙力測定テストに関して

今回の語彙力測定調査で使用したテストに関して、簡単に説明しておく。受容語彙数測定に関しては、望月 (1998) の語彙サイズ測定テスト (以下、望月テストと略す) と Schmitt, Schmitt, and Clapham (2001) の VLT を使用した。<sup>4</sup> 望月テストは 1,000 語から 1,000 語ずつ上がっていき、最終 7,000 語までの 7 つのレベルの問題で構成されており、7,000 語までの語彙サイズが推定できる。出題形式は、2 つの日本語に対応する英単語を 6 つの選択肢から選ぶ形式で、1 つのレベルに 30 問ある。問題の一例を挙げておく。



このテストは、VLT 同様、2,000 語、3,000 語、5,000 語、大学レベル、10,000 語レベルの5つのレベルで構成されている。各レベルは18問より成り、次の例のように完成させるべき英単語の最初の数文字が提示され、回答者は文脈とこの数文字を手がかりにして、単語を完成させる。問題の一例を挙げておく。

1. I m glad we had this oppo\_\_\_\_\_ to talk.
2. There are a doz\_\_\_\_\_ eggs in the basket.

語知識の深さの測定に関しては、Read (1998) の WAT を使用した。このテストは、学習者がある単語をよく知っていることは、母語話者がもつその語のネットワークに類似したネットワークを構築している、という前提のもとに作成された40の形容詞を目標語とし、その連想語を4つ選ばせる形式になっている。目標語が枠の外にあり、それと連合的關係にある語(同義語)を枠内の左の語群から1~3語、統語的關係にある語(コロケーションを形成する語)を右の語群から1~3語選ぶようになっている。問題の一例を挙げておく。

strange

beautiful quick surprising thirsty	change doctor noise school
------------------------------------	----------------------------

この場合、連合的連想語は quick と surprising で、統語的連想語は change と noise で、この4語が正解ということになる。

## 5. 被験者とテストの実施に関して

2006年と2007年の2回、アカデミックレベルがほぼ同じと見なされている関西の2つの私立大学で語彙力測定テストを実施した。2006年の被験者は1回生から8回生までの256名(3回生以上の学生数は約5分の1)であっ

た。望月テスト（L方式に基づく）とVPTは全員が受験。VLT（F方式に基づく）に関しては199名が受験した。各々の測定テストの解答時間は45分とした。読解力測定テストの被験者は52名で、問題は、文中の10～12箇所ある空所に入る適語を4つの単語の中から選ばせる多肢選択式の空所補充問題、scanningで特定の情報を探し出したり、skimmingでパラグラフの要旨に関して答えさせる記述問題から構成されている。被験者は全て文系の学生なので、background knowledgeの有無による得点差ができるだけ出ないようにするために、内容は科学を扱ったものとした。2種類のテーマの異なる科学記事を扱ったテストを解答時間90分で、2回実施した。4つのテストのリーダビリティに関しては、Flesch Reading Easeで63～38、Flesch-Kincaid Grade Levelで8th～15thなので、読解の難易度に関しては、中位のレベルから難度の高い問題と言えるであろう。聴解力測定テストの被験者は61名で、問題は15箇所の空欄の単語を聞き取らせスベルを書かせる cloze 形式のテストである。このクラスには2割程度理系の学生も受講していたが、アメリカのCNNの科学番組 Science Desk のスクリプトを使用した。番組を収録したDVDを5回視聴させ、15箇所の空所の単語を書き取らせた。1回のテストで2つの番組を視聴させ解答させるテストを、2回実施した。2007年の被験者は前年と同じ2つの大学の1、2年生312名であった。大きな受容語彙サイズを測定するには難のある望月テストは使用せず、VLT、VPT、WATを使用し、全員がこの3つの語彙力測定テストを受験した。各々の測定テストの解答時間は45分とした。読解力測定テストの被験者は66名、聴解力測定テストの被験者は60名であった。2つの測定テスト問題は前年度と同じものを使用した。

## 6. 2006年度の3つの語彙力測定テストのデータ

被験者数 256 名の望月テスト (L 方式) による最大受容語彙数は 6,467 語, 最小受容語彙数は 2,133 語, 平均受容語彙数は 4,676 語であった。同じ被験者数の VPT による最大発表語彙数は 4,056 語, 最小発表語彙数は 278 語, 平均発表語彙数は 1,677 語であった。被験者数 199 名の VLT (F 方式) による最大受容語彙数は 7,533 語, 最小受容語彙数は 1,600 語, 平均受容語彙数は 3,954 語であった。望月テストと VPT との相関係数は 0.72, VLT と VPT との相関係数は 0.77 という両者ともに強い相関係数が算出された。各々のテストの詳しいデータに関しては, 付録の 1. および 2. を参照されたし。

### 6.1. 読解力測定テストと2つのテストによる受容語彙数および発表語彙数に関するデータの分析と重回帰分析

被験者数は 52 名で, 望月テストによる受容語彙数の平均は 5,193 語, VLT による受容語彙数の平均は 4,717 語, 発表語彙数の平均は 2,100 語であった。望月テストによる受容語彙数と VLT による受容語彙数との相関係数は 0.86, 望月テストによる受容語彙数と VPT による発表語彙数との相関係数は 0.75, VLT による受容語彙数と VPT による発表語彙数との相関係数は 0.78 であった。読解力測定テストの得点と望月テストによる受容語彙数との相関係数は 0.77, VLT による受容語彙数との相関係数は 0.83, VPT による発表語彙数との相関係数は 0.76 であった。次に望月テストによる受容語彙数, VLT による受容語彙数, VPT による発表語彙数が読解力テストおよび聴解力テストの得点とどのような関係があるのかを探るべく重回帰分析を試みた。重回帰分析はいくつかの要因の間の因果関係を調べるために使用される統計手法である。端的に言えば, 結果 $\leftrightarrow$ 原因 1 + 原因 2 +  $\dots$  + 原因 P という因果関係を, 数式を使って導き出し説明するために用いられる手法で



ある。ここでは読解力測定テストの得点を目的変量（結果）、望月テストによる受容語彙数と VLT による受容語彙数および VPT による発表語彙数を説明変量（原因）として、重回帰分析をおこなった。

表 2. 読解力測定テストと 2 つのテストによる受容語彙数および発表語彙数に関する重回帰式

変数名	偏回帰係数	標準偏回帰係数	T 値	標準誤差	偏相関	単相関
VPT	0.00727	0.3070	2.4743	0.002938	0.3363	0.7740
VLT	0.009013	0.4983	3.1187	0.00289	0.4105	0.8272
望月	0.002283	0.1039	0.6957	0.003281	0.0999	0.7588
定数項	1.830362		0.1914	9.564761		

ここから、読解力テストの得点 =  $0.00727 \times \text{VPT}$  による発表語彙数 +  $0.009013 \times \text{VLT}$  による受容語彙数 +  $0.002283 \times \text{望月テスト}$  による受容語彙数 + 1.830362 という読解力テストの得点を予測する一次式が導き出せる。一例として、VPT の発表語彙数 2,333 語、VLT の受容語彙数 5,533 語、望月テストの受容語彙数 6,200 語の学生のデータを当てはめて読解力テストの得点を予測してみる。 $0.00727 \times 2,333 + 0.009013 \times 5,533 + 0.002283 \times 6,200 + 1.830362 = 82.8$  点という得点が算出されるが、この予測得点はこの学生の実際読解力テストの得点 84 点ときわめて近い得点である。また標準偏回帰係数から、得点を説明する要因として一番大きいのが VLT による受容語彙数 (0.4983)、次いで VPT による発表語彙数 (0.3070)、最後が望月テストによる受容語彙数 (0.1039) であることがわかる。この重回帰式がデータにどれくらいよく当てはまっているかに関する決定係数 ( $R^2$ ) は 0.73 であり、1 に近いほど当てはまりが良いと考えられるので、この重回帰式はデータにかなりよく当てはまっていると考えられる。実測値と予測値との間の相関性の強さを示す重相関係数 ( $R$ ) は 0.85 であり、これも 1 に近いほど当てはまりが良いと考えられるので、この重回帰式によって導き出される予測値は先程の学生のデータを用いた実例からも分かるように、かなり実測値にちかい

数値といえる。従ってこの重回帰式は実測値を導き出すうえでかなり信頼度の高い数式であるといえる。

## 6.2. 聴解力測定テストと望月テストによる受容語彙数, VLT による受容語彙数および VPT による発表語彙数に関するデータの分析と重回帰分析

被験者数は 61 名で, 望月テストによる受容語彙数の平均は 5,007 語, VLT による受容語彙数の平均は 4,275 語, 発表語彙の平均は 1,972 語であった。望月テストによる受容語彙数と VLT による受容語彙数との相関係数は 0.73, 望月テストによる受容語彙数と VPT による発表語彙数との相関係数は 0.67, VLT による受容語彙数と VPT による発表語彙数との相関係数は 0.63 であった。聴解力測定テストの得点と望月テストによる受容語彙数との相関係数は 0.39, VLT による受容語彙数との相関係数は 0.54, VPT による発表語彙数との相関係数は 0.63 であった。聴解力測定テストの得点を目的変量 (結果), 望月テストによる受容語彙数と VLT による受容語彙数および VPT による発表語彙数を説明変量 (原因) として, 重回帰分析をおこなった。

表 3. 聴解力測定テストと望月テストによる受容語彙数, VLT による受容語彙数および VPT による発表語彙数に関する重回帰式

変数名	偏回帰係数	標準偏回帰係数	T 値	標準誤差	偏相関	単相関
VPT	0.012061	0.5599	4.1006	0.002941	0.4773	0.6254
VLT	0.005596	0.3816	2.5675	0.00218	0.3220	0.5426
望月	-0.00627	-0.2588	1.6587	0.003777	-0.2146	0.3943
定数項	28.84357		2.1826	13.21522		

ここから, 聴解力テストの得点 =  $0.012061 \times \text{VPT による発表語彙数} + 0.005596 \times \text{VLT による受容語彙数} - 0.00627 \times \text{望月テストによる受容語彙数} + 28.84357$  という聴解力テストの得点を予測する一次式が導き出せる。

一例として、VPTの発表語彙数2,333語、VLTの受容語彙数5,533語、望月テストの受容語彙数6,200語の学生のデータを当てはめて聴解力テストの得点を予測してみる。 $0.012061 \times 2,556 + 0.005596 \times 3,967 + -0.00627 \times 5,700 + 28.84357 = 46.1$ 点という得点が算出されるが、この予測得点はこの学生の実際の聴解力テストの得点38点とはひらきがある。また標準偏回帰係数から、得点を説明する要因として一番大きいのがVPTによる発表語彙数(0.5599)、次いでVLTによる受容語彙数(0.3816)、最後が望月テストによる受容語彙数(-0.2588)であることがわかる。前述の読解力を予測する重回帰式に比べると得点予測の精度は劣り、決定係数( $R^2$ )は0.46、重回帰係数(R)は0.67であった。

## 7. 2007年度のデータの分析

今回の3種類の語彙力測定テストの被験者数は312名である。VLT(F方式)による最大受容語彙数は6,367語、最小受容語彙数は867語、平均受容語彙数は3,832語であった。VPTによる最大発表語彙数は3,556語、最小発表語彙数は111語、平均発表語彙数は1,388語であった。WATによる語彙知識の深さの最高点は129点、最低点は33点、平均点は94点であった。VLTとVPTとの相関係数は0.78、VLTとWATとの相関係数は0.64、VPTとWATとの相関係数は0.65であった。詳しいデータに関しては、付録の3-5.を参照されたし。

### 7.1. 読解力測定テストと VLT による受容語彙数, VPT による発表語彙数および WAT による語知識の深さに関するデータの分析と重回帰分析

被験者数は 66 名で, VPT による発表語彙数の平均は 1,905 語, VLT による受容語彙数の平均は 4,747 語, WAT による語知識の深さの平均は 107 語であった. VPT による発表語彙数と VLT による受容語彙数との相関係数は 0.76, VPT による発表語彙数と WAT による語知識の深さとの相関係数は 0.78, VLT による受容語彙数と WAT による語知識の深さとの相関係数は 0.83 であった. 読解力測定テストの得点と VPT による発表語彙数との相関係数は 0.74, VLT による受容語彙数との相関係数は 0.68, WAT による語知識の深さとの相関係数は 0.75 であった. 読解力測定テストの得点を目的変数 (結果), VLT による受容語彙数, VPT による発表語彙数および WAT による語知識の深さを説明変数 (原因) として, 重回帰分析をおこなった.

表 4. 読解力測定テストと VLT による受容語彙数, VPT による発表語彙数および WAT による語知識の深さに関する重回帰式

変数名	偏回帰係数	標準偏回帰係数	T 値	標準誤差	偏相関	単相関
VPT	0.010476	0.3738	2.8788	0.003639	0.3434	0.7385
VLT	0.000942	0.0581	0.3960	0.002377	0.0502	0.6838
WAT	0.603207	0.4136	2.7236	0.221478	0.3269	0.7516
定数項	-4.99786		0.3228	15.48519		

ここから, 読解力テストの得点 =  $0.010476 \times \text{VPT}$  による発表語彙数 +  $0.000942 \times \text{VLT}$  による受容語彙数 +  $0.603207 \times \text{WAT}$  による語知識の深さ - 4.99786 という読解力テストの得点を予測する一次式が導き出せる. また標準偏回帰係数から, 得点を説明する要因として一番大きいのが WAT による語知識の深さ (0.4136), 次いで VPT による発表語彙数 (0.3738), 最後が VLT による受容語彙数 (0.0581) であることがわかる. 決定係数 ( $R^2$ )

は 0.63, 重相関係数 (R) は 0.79 であるところから, この重回帰式が読解テストの得点を予測するうえで, 2006 年度の読解力テストの点数を予測する重回帰式ほどではないが, おおむね信頼できる数式といえる。

## 7.2. 聴解力測定テストと VLT による受容語彙数, VPT による発表語彙数および WAT による語知識の深さに関するデータと分析

被験者数は 60 名で, VPT による発表語彙数の平均は 1,596 語, VLT による受容語彙数の平均は 4,168 語, WAT による語知識の深さの平均は 101 語であった。VPT による発表語彙数と VLT による受容語彙数との相関係数は 0.75, VPT による発表語彙数と WAT による語知識の深さとの相関係数は 0.56, VLT による受容語彙数と WAT による語知識の深さとの相関係数は 0.70 であった。聴解力測定テストの得点と VPT による発表語彙数との相関係数は 0.62, VLT による受容語彙数との相関係数は 0.58, WAT による語知識の深さとの相関係数は 0.34 であった。聴解力測定テストの得点を目的変数 (結果), VLT による受容語彙数, VPT による発表語彙数および WAT による語知識の深さを説明変数 (原因) として, 重回帰分析をおこなった。

表 5. 聴解力測定テストと VLT による受容語彙数, VPT による発表語彙数および WAT による語知識の深さに関する重回帰式

変数名	偏回帰係数	標準偏回帰係数	T 値	標準誤差	偏相関	単相関
VPT	0.014649	0.4509	2.9660	0.004939	0.3685	0.6241
VLT	0.007868	0.3402	1.9286	0.00408	0.2496	0.5756
望月	-0.21009	-0.1440	1.0167	0.206641	-0.1346	0.3447
定数項	51.57176		3.3173	15.54651		

ここから, 聴解力テストの得点 =  $0.014649 \times \text{VPT による発表語彙数} + 0.007868 \times \text{VLT による受容語彙数} - 0.21009 \times \text{WAT による語知識の深さ} + 51.57176$  という聴解得点を予測する一次式が導き出せる。また標準偏回帰係

数から、得点を説明する要因として一番大きいのがVPTによる発表語彙数(0.4509)、次いでVLTによる受容語彙数(0.3402)、最後がWATによる語彙知識の深さの得点(-0.144)であることがわかる。前述の読解力を予測する重回帰式に比べると得点予測の精度は劣り、決定係数( $R^2$ )は0.43、重相関係数( $R$ )は0.65であった。この二つの係数の数値は、2006年度の聴解力テストの点数を予測する重回帰式の二つの係数と酷似したものである。

## 8. 今までの語彙力調査と今回の語彙データの考察

筆者は以前今回の調査対象校のうち入学時にプレースメントテストを実施して、能力別クラス授業をおこなっている大学で、最上級のAdvancedのレベルから最も低いPre-Intermediateのレベルの学生を対象に望月テストを実施し、望月テストがプレースメントテストの代替として使用できる可能性に関して調査した。<sup>5</sup> 被験者29名のAdvancedクラスの最大受容語彙数は6,133語、最小受容語彙数は4,467語、平均受容語彙数は5,319語であった。被験者数27名のUpper Intermediateクラスの最大受容語彙数は5,833語、最小受容語彙数は3,300語、平均受容語彙数は5,023語であった。被験者数578名のIntermediateクラスの最大受容語彙数は6,033語、最小受容語彙数は2,067語、平均受容語彙数は4,475語であった。被験者数136名のPre-Intermediateクラスの最大受容語彙数は5,800語、最小受容語彙数は1,167語、平均受容語彙数は3,333語であった。被験者がIntermediateレベルに集中しており、またUpper Intermediate, Intermediate, Pre-Intermediateレベルに5,800語を超えるようなじゅうぶんAdvancedに入れるだけの語彙力を持ったいわゆるはずれ値に相当する学生もいるが、Listening, Grammar, Reading問題から構成されるプレースメントテストの得点と望月テストによる語彙数との間にはかなり強い相関性が認められた。

また筆者の受容語彙数とTOEICおよびTOEFLの得点との相関性を考察し

た研究でも70名の被験者の望月テストによる受容語彙数とTOEFLの得点との相関係数は0.73あった, 被験者22名の望月テストによる受容語彙数とTOEICの得点との相関係数は0.62, VLTによる受容語彙数とTOEICの得点との相関係数は0.72であった。<sup>6</sup>

今回の調査でも2006年度の読解力テストの点数と望月テストによる受容語彙数との相関係数は0.77, VLTによる受容語彙数との相関係数は0.83というかなり強い相関係数が算出された。2007年度の読解力テストの得点とVLTによる受容語彙数との相関係数は0.68であった。注目すべきは, 読解力テストの得点とVPTによる発表語彙数とが強い相関性を示している点である。2006年度の両者の相関係数は0.76, 2007年度のそれは0.74であった。また2006年度の読解力テストの点数を目的変量とする重回帰式から, 得点の説明要因として望月テストによる受容語彙数よりVPTによる発表語彙数のほうが比重が大きいこと, 2007年度の重回帰式から, 得点の説明要因としてVLTによる受容語彙数よりもVPTによる発表語彙数のほうが重要度が高いことが判明した。発表語彙数が, 読解力とここまで強い相関性を持っていることは予想外のことであった。

聴解力テストの得点との相関係数に関しては, 2006年度の場合望月テストとの相関係数は0.39, VLTによる受容語彙数との相関係数は0.54, VPLによる発表語彙数との相関係数は0.63であった。2007年度の聴解力テストの得点とVLTによる受容語彙数との相関係数は0.58, VPTによる発表語彙数との相関係数は0.62, WATによる語彙知識の深さの得点との相関係数は0.34であった。ここでは聴解力テストの得点が両年ともにVPTによる発表語彙と最も強い相関性を示している点に興味深い。また2006年度の聴解力テストの点数を目的変量とする重回帰式から, 得点の説明要因として一番大きいのがVPTによる発表語彙数, 次いでVLTによる受容語彙数, 最後が望月テストによる受容語彙数であることが分かる。2007年度の重回帰式からは, 得点の説明要因として一番大きいのがVPTによる発表語彙数, 次い

で VLT による受容語彙数, 最後が WAT による語彙知識の深さの得点であることが読み取れる. ここからも, 聴解力テストの得点と VPT による発表語彙数との強い相関性が首肯できるのであろう.

## 9. 語彙学習への提言

昨今の学生の英語力が低下してきている大きな原因として, 語彙力の低下が挙げられる. この直接の原因は, 文部科学省が指導要領に定めた語彙数の上限が, 中学と高校合わせて 1951 (昭和 26) 年には 6,800 語あったのが, 改訂ごとに削減され, 現行の指導要領では 2,700 語にまで下がってしまったことに起因する. この論文では主として読解力と聴解力との絡みで語彙力のもつ重要性をデータを基に説明してきた. 筆者としては語彙力を伸ばすことの重要性を少しでも認識していただける一助になればと思う. 受容語彙数 5,000 語 F までの初級および中級レベルの学生に対しては, 読んで意味の分かる受容語彙数を増やすことと同時に, 綴りをきちんと書いて使いこなせる発表語彙数の拡張を, 5,000 語 F 以上の上級レベルの学生に対しては, 受容語彙数と発表語彙数の増強と平行して, 語についての知識を深める語彙学習を実践するよう指導していただくことを提言しこの稿を終えたい.<sup>7</sup>



付録

1. 望月テストによる受容語彙数と VPT による発表語彙数に関するデータ

語彙数のレベル	人数	受容語彙数の平均	発表語彙数の平均	発表語彙数との相関係数
6,000-6,467	21	6,154	2,741	X
5,000-5,999	78	5,385	2,200	X
4,000-4,999	106	4,482	1,428	X
3,000-3,999	40	3,628	1,040	X
2,133-2,999	11	2,512	652	X
	256	4,676	1,677	0.72

2. VLT テストによる受容語彙数と VPT による発表語彙数に関するデータ

語彙数のレベル	人数	受容語彙数の平均	発表語彙数の平均	発表語彙数との相関係数
6,000-7,533	10	6,523	3,111	X
5,000-5,999	33	5,431	2,520	X
4,000-4,999	41	4,375	1,900	X
3,000-3,999	70	3,524	1,421	X
1,600-2,999	45	2,585	1,036	X
	199	3,954	1,700	0.77

3. VLT による受容語彙数と VPT による発表語彙数との相関性

語彙数のレベル	人数	受容語彙数の平均	発表語彙数の平均	発表語彙数との相関係数
6,000-6,367	10	6,170	2,311	X
5,000-5,999	44	5,435	2,182	X
4,000-4,999	80	4,380	1,635	X
3,000-3,999	105	3,473	1,139	X
2,000-2,999	66	2,564	811	X
867-1,999	7	1,500	484	X
	312	3,832	1,367	0.78

4. VLT による受容語彙数と WAT による語知識の深さとの相関性

語彙数のレベル	人数	受容語彙数の平均	語彙知識の深さの平均	発表語彙数との相関係数
6,000-6,367	10	6,170	119	X
5,000-5,999	44	5,435	111	X
4,000-4,999	80	4,380	101	X
3,000-3,999	105	3,473	87	X
2,000-2,999	66	2,564	82	X

102 語彙力増強の重要性—二つの大学の語彙力測定テストのデータに基づく—

語彙数のレベル	人数	受容語彙数の平均	語彙知識の深さの平均	発表語彙数との相関係数
867-1,999	7	1,500	70	X
	312	3,832	94	0.64

5. VPTによる発表語彙数とWATによる語知識の深さとの相関性

語彙数のレベル	人数	受容語彙数の平均	語彙知識の深さの平均	発表語彙数との相関係数
3,000-3,556	4	3,209	115	X
2,000-2,999	60	2,445	114	X
1,500-1,999	50	1,678	100	X
1,000-1,499	98	1,227	91	X
111-999	100	694	81	X
	312	1,388	94	0.65

注

本稿は、第13回日英・英語教育学会年次大会（成蹊大学，2007年10月）および第2回JACET英語辞書研究会・英語語彙研究会合同研究大会（麗澤大学，2008年3月）における口頭発表の原稿に加筆・修正したものである。

- 1 岡本（2005）は、京都大学1, 2回生283名を対象に、VLTを用いた受容語彙数の調査を5月におこなった際の平均語彙数が5,895語であったが、5ヵ月後の10月に同じ学生に再テストをおこなったところ25%も語彙数が減少したことを報告している。
- 2 相関係数の数値に関しては、2007年JACET主催のサマーセミナーの講師であったWilliam Grabeのハンドアウトから引用。
- 3 中田（2007）もオーストラリアのシドニー大学大学院でTESOLを専攻する現職英語教員33名を対象におこなった読解能力と語彙サイズおよび語彙デプスとの相関性を比較する調査で、語彙サイズよりも語彙デプスのほうが読解力との相関性が強いことを報告している。今回の筆者の調査でも中級（3,000語F）および上級（5,000語F）の学習者の読解力との相関性が最も強いのが語彙知識の深さであることが判明した。
- 4 今回使用したA Vocabulary Levels Test: Test BはNationが作成したA Vocabulary Levels TestにSchmittらが改良の手を加えたものである。Nationのテストに関してはNation（2001）を、Schmittらに関してはSchmitt et al.（2001）を参照。
- 5 森永・木村（2005）を参照。

6 森永 (2006c) を参照.

7 西澤 (2003) は, 高校生が卒業までに目標とすべき語彙サイズに関して受容語彙の場合 L 方式で換算して 5,000 ~ 6,000 語 (望月テスト), F 方式で換算して 3,000 語 (VLT), 発表語彙数の場合 L 方式で換算して 2,000 ~ 2,500 語, F 方式で換算して 1,250 語 (VPT) を提言している. 今回の調査の対象となった 2 大学の学生の大半はこの目標数値をクリアーしているが, 私見ではアカデミックな英文を読みこなすには受容語彙数が 5,000 語 (F) 以上, またある程度きちんとしたアカデミックペーパーを書くためには 3,000 語 (F) 以上が必要である.

#### 謝辞

今回の論文執筆にあたって, 形式, 内容の両面にわたり有益な助言をいただいた同志社大学言語文化教育センターの西納春雄先生にお礼を申し上げます.

#### 参考文献

- 石川慎一郎・中野秀子・玉井健・横川博一・ロリ・ゼヌック・西出. (2007). 「新しい語彙指導のヒント—最新の研究と現場をつなぐ〜」『英語教育』55 (13): 10-36.
- 岡本真由美. (2005). 「大学生の外国語語彙知識の減少について—事例研究」JACET 関西支部 2005 年度秋季大会.
- 門田修平・池村大一郎. (編著)『英語語彙指導ハンドブック』東京: 大修館書店
- 中田貴眞. (2007). 「英語学習上級者における語連想知識と学術的読解能力の関係—Qian & Schedl (2004) に関連して」第 13 回日英・英語教育学会研究大会.
- 西澤正幸. (2003). 「語彙数はどれだけ必要か?」『英語教育』52 (7): 8-10.
- 西澤正幸・古家貴雄・折田充・相澤一美・望月正道・投野由紀夫. (2003). 「語彙習得のメカニズム」『英語教育』52 (7): 8-27
- 望月正道. (1998). 「日本人英語学習者のための語彙サイズテスト」『財団法人語学教育研究所紀要』12: 27-53.
- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫. (2003). 『英語語彙の指導マニュアル』東京: 大修館書店.
- 森永弘司. (2004). 「語彙力と読解力の相関性及び学習者の語彙力の伸びとテキストのリーダビリティとの関連性に関する一考察」全国英語教育学会第 30 回全国大会.
- 森永弘司. (2006a). 「語彙数の増加と読解力及び聴解力の伸びとの間の相関性に関する一考察」関西英語教育学会第 10 回記念研究大会.
- 森永弘司. (2006b). “Which is More Effective in Developing Students’ Vocabularies,

- ESP or Non-ESP Programs?" Asia TEFL 2006 福岡大会.
- 森永弘司. (2006c). 「語彙力測定テストと TOEIC, TOEFL との相関に関する一考察」 JACET 英語語彙研究会第 3 回研究大会.
- 森永弘司. (2007a). 「Nation の A Vocabulary Levels Test を利用した学生の総語彙数及びアカデミック語彙数と学習成績との相関性に関する一考察」 関西英語教育学会第 11 回研究発表大会.
- 森永弘司. (2007b). 「語彙サイズ測定テスト (望月) と The Vocabulary Levels Test (Nation, Schmitt) に関する一考察—相関性を中心に—」 JACET 2007 年度関西支部春季大会.
- 森永弘司. (2007c). 「受容語彙と発表語彙の相関性, 読解力と受容語彙と発表語彙との相関性及び聴解力と受容語彙と発表語彙との相関性について」 第 13 回日英・英語教育学会年次大会.
- 森永弘司. (2008). 「語彙サイズと語彙デプス, どちらが読解力との相関性が強いのか」 第 2 回 JACET 英語辞書研究会・英語語彙研究会合同研究大会.
- 森永弘司・木村修平. (2005). 「語彙サイズ測定テストのプレイズメントとしての妥当性に関する一考察」 第 11 回日英・英語教育学会研究大会.
- Carter, R. (1998). *Vocabulary: Applied linguistic perspective*. London: Routledge.
- Laufer, B., & Nation, P. (1999). A vocabulary size test of controlled productive ability. *Language Testing*, 16, 36-55.
- Meara, P. (1992). *EFL vocabulary test*. Swansea: University College Swansea.
- Meara, P. (1996). The dimension of lexical competence. In G. Brown, K. Malmkjer & J. Williams (Eds.), *Performance and competence in second language acquisition*. (pp. 35-53). Cambridge: Cambridge University Press.
- Nation, I.S.P. (1990). *Teaching and learning vocabulary*. Boston: Heinle & Heinle.
- Nation, I.S.P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Oller, J.W.Jr. (1979). *Language tests at school*. London: Longman.
- Pike, L.W. (1979). *An evaluation of alternative item formats for testing English as a foreign language*. Princeton: Educational Testing Service.
- Qian, D. (1999). Assessing the roles of depth and breadth of vocabulary knowledge in reading comprehension. *Canadian Modern Language Review*, 56, 282-307.
- Qian, D. (2002). Investigating the relationship between vocabulary knowledge and academic reading performance: An assessment perspective. *Language Learning*, 52, 513-536.
- Read, J. (2000). *Assessing vocabulary*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Schmitt, N. (2000). *Vocabulary in language testing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schmitt, N., & McCarthy, M. (Eds.). (1997). *Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schmitt, N., Schmitt, D., & Clapham, C. (2001). Developing and exploring the behaviour of two new versions of the *Vocabulary Levels Test*. *Language Testing*, 18, 55-88.
- Schoonen, R., Hulstijn, J., & Bossers, B. (1998). Metacognitive and language-specific knowledge in native and foreign language reading comprehension: An empirical study among Dutch students in grades 6, 8, and 10. *Language Learning*, 48, 71-106.